九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

栄花物語の表現性についての研究

二宮，愛理

https://hdl.handle.net/2324/4474906

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	二宮　愛理
論　文　名	栄花物語の表現性についての研究
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　辛島　正雄 副　査　九州大学　准教授　川平　敏文 副　査　九州大学　准教授　青木　博史 副　査　九州大学　教授　坂上　康俊

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、平安文学史において「歴史物語」というジャンルに分類され、史実との突き合わせを中心に研究が重ねられてきた『栄花物語』について、「何を書いているか」に重点が置かれてきた従来の研究方法を見直し、「どのように書いているか」に着目することで、その表現の特質、ひいては〈文学性〉について解明しようとしたものである。

第一章では、巻五「浦々の別れ」に見られる史実との齟齬に注目することで、中宮定子腹の敦康親王の誕生時期が早められ、女院詮子の病悩への言及がなく、左遷された伊周・隆家兄弟の動向にも様々な作為が働いていることを確認する。その上で、この巻の伊周が、「作り物語」である『源氏物語』における光源氏の須磨流離と重ねられていることについても、滅びゆく中関白家に最後の花を持たせる一方、巻六以降に展開する彰子の入内や道長の繁栄の本格化の邪魔とならぬよう、『源氏』との対比によって女院詮子や道長が悪役と映りかねない史実を改変し、また即位することのできない敦康親王の悲運への眼差しを提供するなど、大胆にして巧みな年次の操作が行われたことを、慎重に解き明かしている。

このように、巻五の主人公ともいうべき伊周が、その後どのような思いを胸に最期を迎えたかについて、巻八「はつはな」での彼の遺言に即して解明しようとしたのが、第三章と第四章である。そこでは、後ろ盾のない二人の娘たちの将来を危惧しながらも、不安的中の身の上に娘たちが陥ってしまうことが、前例としての為光の四女と対比される中で描かれているとする。また、伊周の遺言が、『源氏』の宇治の八宮が二人の娘たちに残した訓戒と重なる点の多いことから、ここに物語における「伏線の構造」を見出している。

また、第二章では、『源氏』に対して蓄積されてきた引歌研究の成果を参考に、正編（巻一～巻三十）における引歌表現を精査すると共に、その様な表現の目立つ六つの巻の特徴について考察した結果、大きな流れとして「諸行無常」が浮かび上がる構成が意識されていると分析する。

さらに、第五章と第六章では、『源氏』の「葵」巻における葵の上を哀傷する場面を再検討した上で、巻二十六「楚王の夢」に見える嬉子葬送の折の史実にない「雨」の記述が、「葵」巻でなされていた哀傷表現を踏まえた文学的潤色であることを明らかにする。

以上のように、本論文は『栄花物語』の表現のありようについて、史実との関係や『源氏物語』の受容に目を配りながら、本文に即した説得力のある検討によって従前の研究を推し進めたものであり、今後の発展も期待される。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。